

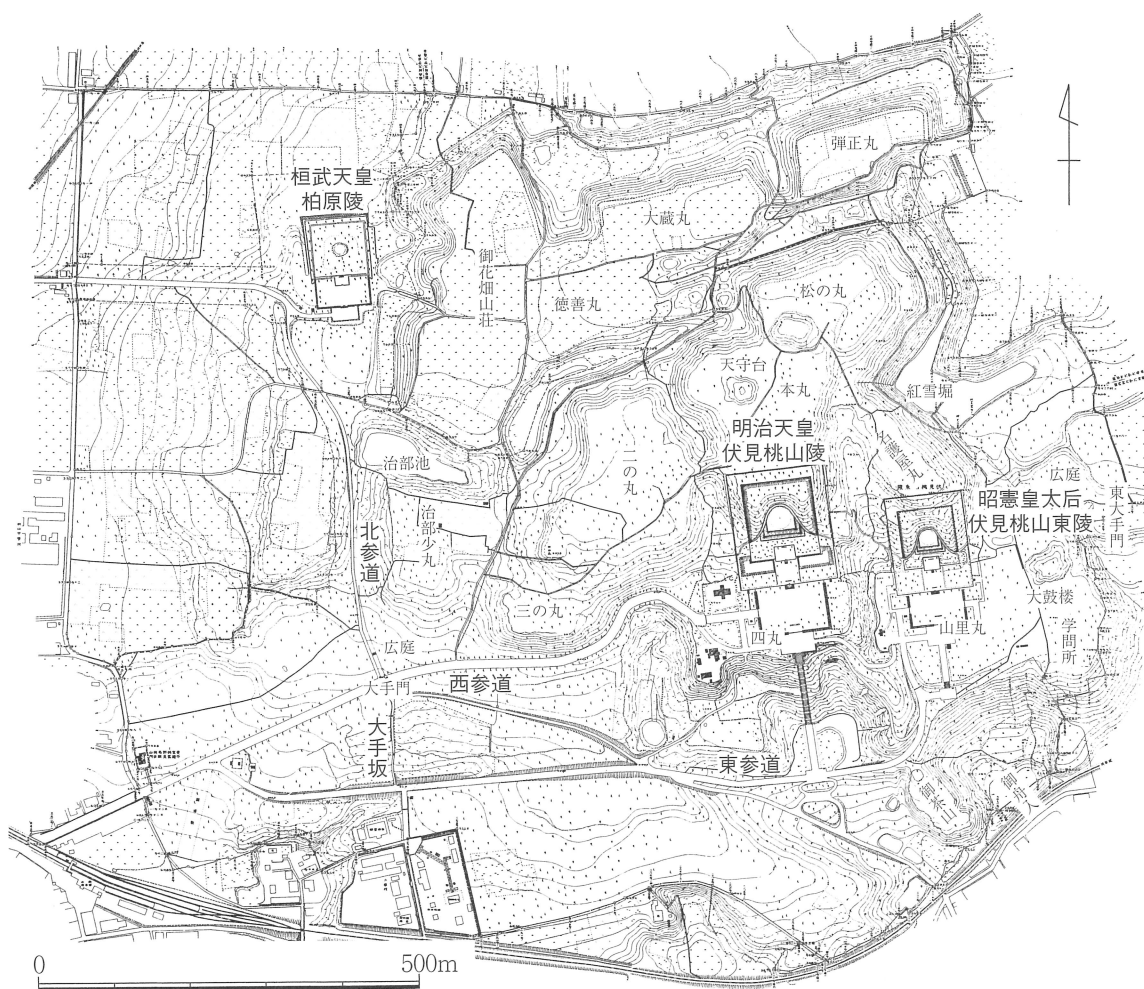
桃山陵墓地下水道管布設工事に伴う立会調査

桃山陵墓地は京都市伏見区桃山町古城山に所在し、域内には明治天皇伏見桃山陵、昭憲皇太后伏見桃山東陵、桓武天皇柏原陵の3陵がある。総面積はおよそ90万㎡で、伏見城(木幡山城)内郭の大部分を含んでおり(第3図)⁽¹⁾、過去には伏見城や武家屋敷に関係する遺物が出土している⁽²⁾。

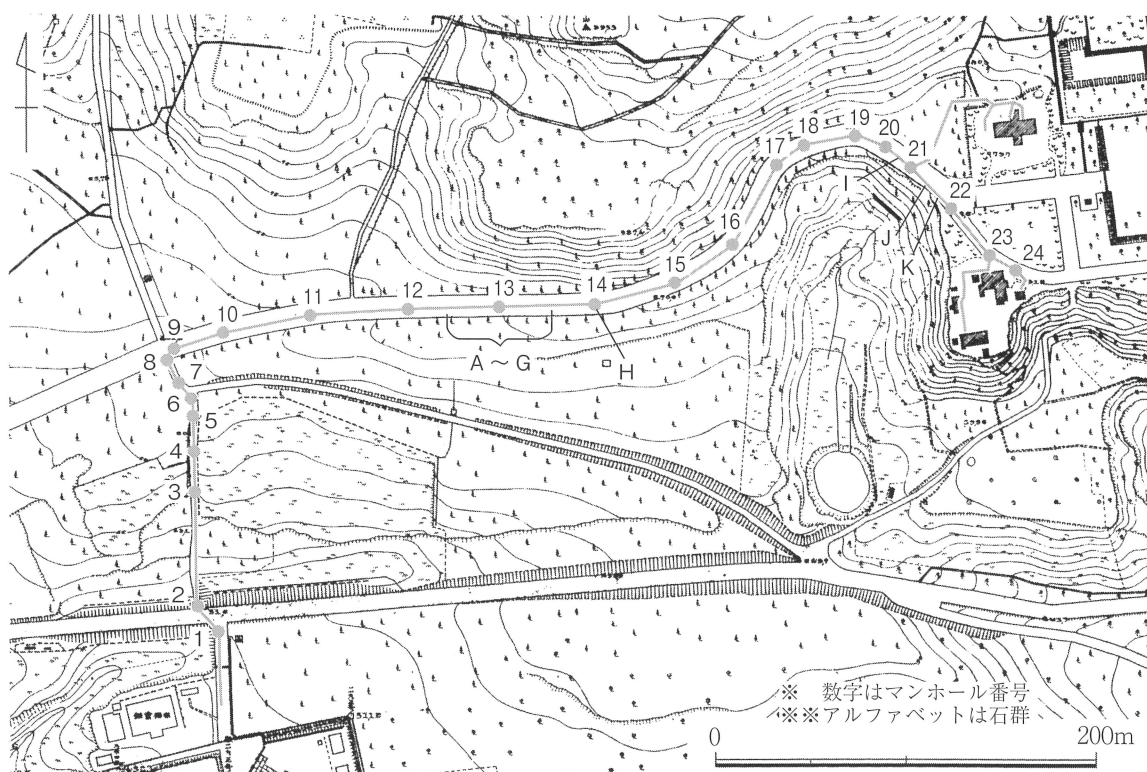
本調査は当地内所在諸施設の下水道を公共下水道管に接続する工事に際して行ったものである。掘削箇所
の総延長はおよそ830mで、途中に設置されたマンホールは24箇所を数える(第4図)。工期は平成19年7月13日～11月15日で、うち9月18～21日と24～30日に本部職員による立会調査を実施した。それ以外
の日程で断続的に行われた掘削に際しては現地職員が立ち会い、遺漏の無いように努めた。

なお、掘削期間中、京都市文化市民局文化財保護課馬瀬智光氏、同宇野隆志氏には現地まで度々ご足労い
ただき、数々のご教示を賜った。記して感謝申し上げる次第である。

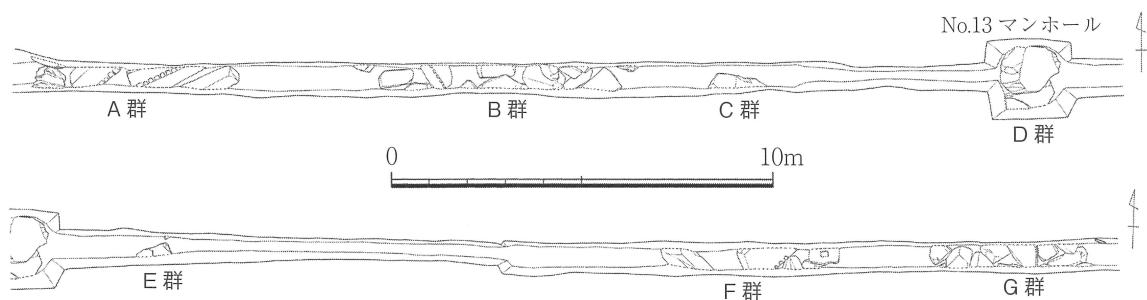
掘削中、西参道で差し渡し1m程度の石が多数出土した。それらは単独あるいは群在しており、群在部分
では積まれたり組まれたりしたような状況は窺えず、「転がっている」という形容がもっともふさわしい状況
であった。石には矢穴や臍穴などが見られ、伏見城に用いられていた石材と判断された。こうした遺構が確
認されたのはNo.12マンホール～No.14マンホール間(A～G)、No.15マンホール地点(H)、No.20マンホール
～No.22マンホール間(I・J・K)の各所で、単独のもの群在するもの併せて11地点におよぶ。付近は伏見
城三の丸の南辺斜面裾から四丸にあたる(第4～6図、図版10・11)。



第3図 桃山陵墓地 地形図 (1/10000)



第4図 桃山陵墓地 掘削箇所位置図 (1/4000)

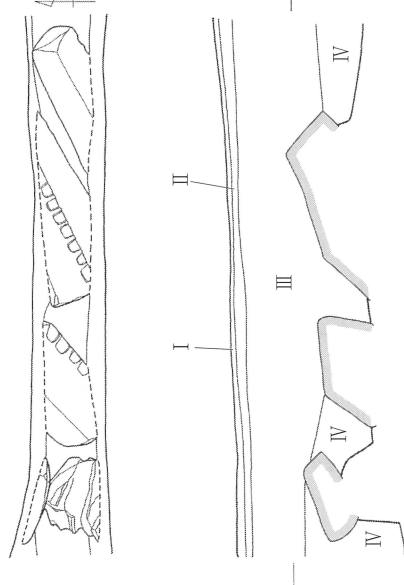


第5図 桃山陵墓地 No.13 マンホール付近 平面図 (1/200)

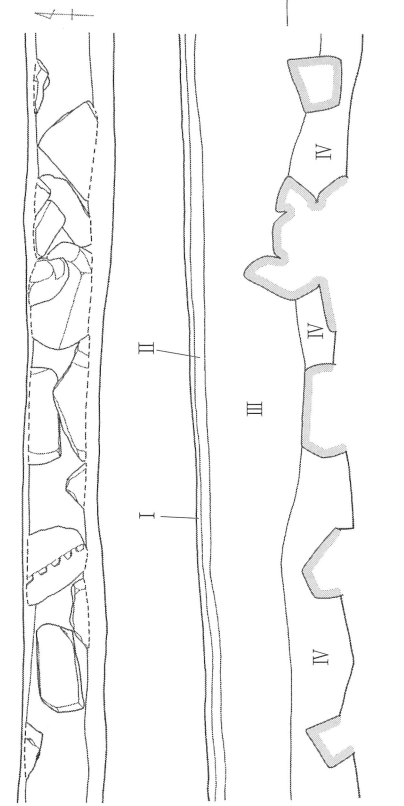
土層の状況は掘削箇所が長大なため一様ではないが、石材検出箇所付近について言えば5層に大別できる。Ⅰ層は参道表土。Ⅱ層は参道など陵墓地の造成土である。Ⅲ層は石材の埋土で、瓦の細片を含む。Ⅳ層は石材と同時に堆積したと思われる層で、拳大の礫が多く含まれ、ところによっては礫層状となる。瓦片を含む。Ⅴ層は地山層で、赤褐色系粘質土や花崗岩のバイラン土層、青灰色系粘質土層などが認められた。Ⅱ層のうちK地点では茶褐色系、灰褐色系、赤褐色系、黄褐色系土からなる細かい土層の単位が確認でき、ほかの箇所とは様相が異なっていた(第6図5)。この付近は伏見桃山陵営建時に旧伏見城の堀のコーナーを埋め立てた部分で⁽³⁾、この土層はその際のものと思われる。Ⅲ層は0.5～1 m程度の厚さがあるが細分はできず、石材が短期間で埋没した状況を示していると思われる。こうしたⅢ層の様相や、石材の「転がっている」かのような出土状況、Ⅳ層の石垣裏込めとおぼしき大量の礫の存在は、今回検出した遺構について、付近の石垣が崩されたのちに大量の土砂で埋め殺されたものであることを示していると思われる。Ⅴ層はNo.14 マンホール～No.15 マンホール間からNo.19 マンホール～No.20 マンホール間にかけての区間で確認することができた。この付近は西参道建設時に三の丸南東隅を切り崩しており⁽⁴⁾、土層の様相もそれを裏付けている。

出土遺物の総数は379点で、そのほとんどが瓦の小片である(第7図)。1は数少ない瓦以外の遺物で、常滑焼の甕である。口縁部の端部は内側につまみ出され、外面には不明瞭な凹線が断続的にみられる。頸部との境界外面には明瞭な凹線が1条めぐる。2～6は桐紋軒丸瓦で、紋様を確認できる2～5はいずれも五七

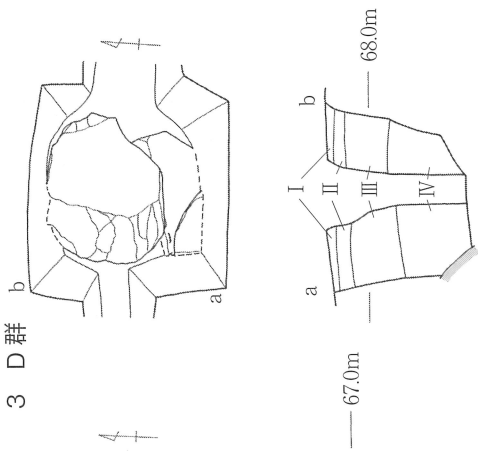
1 A 群



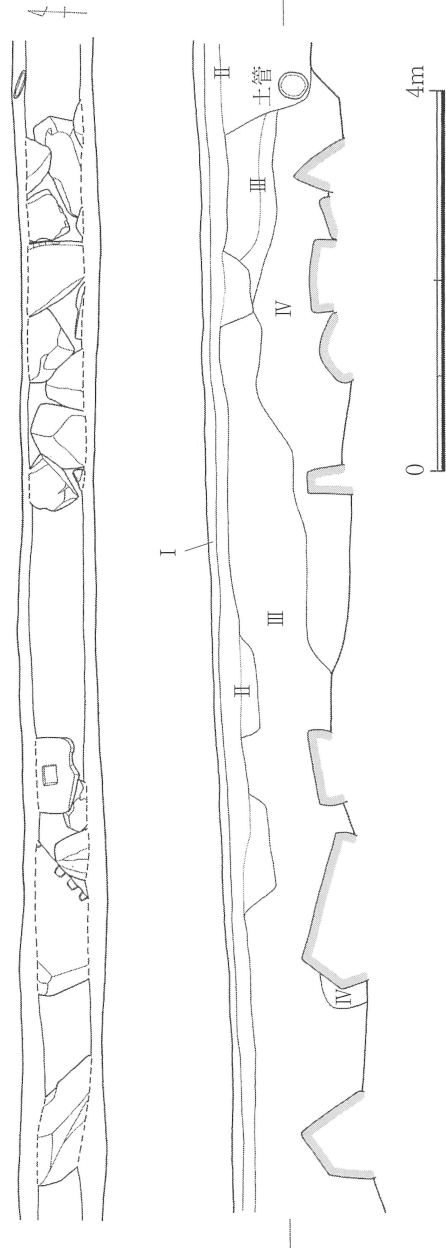
2 B 群



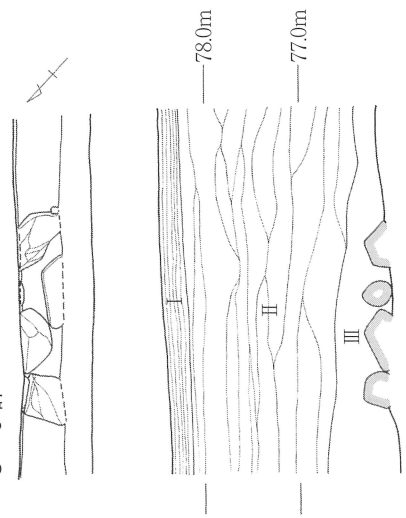
3 D 群



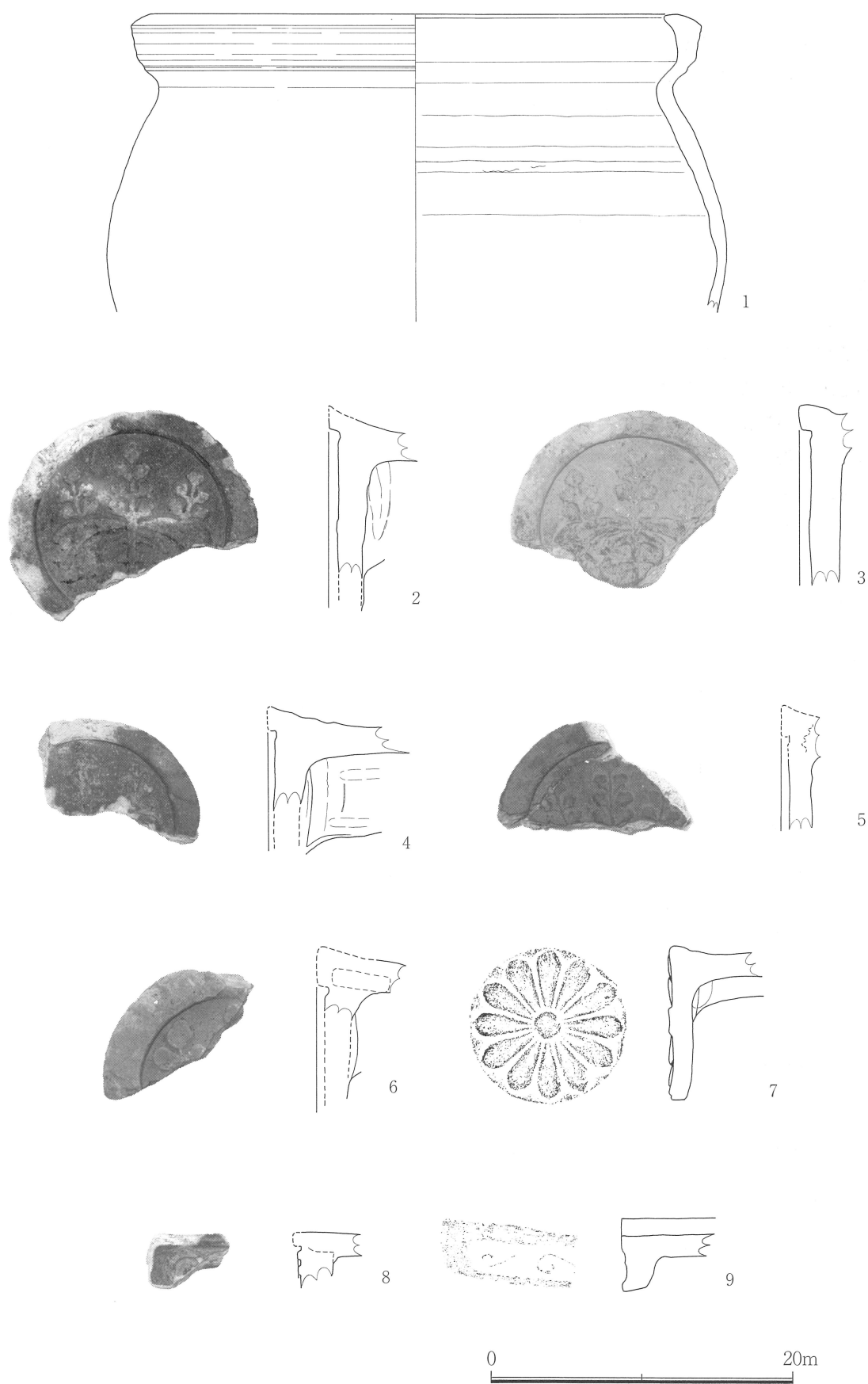
4 F·G 群



5 J 群



第6图 桃山陵墓地 平面图·断面图 (1/80)



第7図 桃山陵墓地 出土品実測図 (1/4)

桐紋である。2～6の全てが金箔あるいはその痕跡が認められる金箔瓦で、金箔の残りは3がもっとも良い。2・3は同范である。7は十二弁菊紋の丸瓦で、径 10.5cmと小さく、棟などに用いられた飾瓦と思われる。8・9は軒平瓦で、8は唐草紋が太いタイプで、9は細いタイプのものである。9ではわずかながらに漆の痕跡が認められ、金箔瓦であったことが分かる。

今回検出された石材がいつ埋まったのかという点については、出土遺物の様相からは明らかにすることができない。当地の歴史を振り返って見ると、既存の石垣を破壊するような大がかりな工事は①関ヶ原の合戦後に行われた徳川家康による再建時(慶長時)、②徳川家光による廃城に伴う破城(元和～寛永時)、③伏見桃山陵宮建時における陵域整備(大正時)、の3回ほど行われており、このいずれかに該当することになると思われる。まず、③の可能性であるが、西参道建設工事の仕様書が石垣や北側の斜面を崩して路盤を整備するような内容でないこと⁽⁵⁾、Ⅱ層のうち明らかに大正時のものと思われる土層とⅢ層の様相が大きく異なること、などの点から否定できる。残るは①か②かであるが、①の段階では縄張りの規模を縮小しつつ小規模な改修でとどめられていると考えられていること⁽⁶⁾、再建時に既存の使用可能な石材を廃棄する可能性は低いと思われること、などの点から、現段階では②によるものと考えておきたい。

石材検出時には既に管路の変更が不可能な状態であり、そのまま存置しておけば工事の支障となるため、調査終了後に撤去した。なお、No.12 マンホール～No.14 マンホール間で出土したものについては、撤去後、出土地点付近の西参道脇に配置し、現在でも見ることができる(図版 11 - 7・8)。

以上、工事は予定通りに施工された。

(有馬 伸)

註

- (1) 伏見城の曲輪の呼称は豊臣期と徳川期で異なっているが、本報告では加藤次郎氏の復元案によった。
加藤次郎『伏見桃山の文化史』、私家版、1953 年。
- (2) 当部が桃山陵墓地内で実施した調査の報告は以下に掲げたものがある。
笠野 毅「桓武天皇陵見張所電灯線引込み工事箇所の立会調査」『書陵部紀要』第 28 号、宮内庁書陵部、1978 年。
笠野 毅「桃山陵墓地内の崖地擁壁設置及び排水管敷設箇所の調査」『書陵部紀要』第 29 号、宮内庁書陵部、1978 年。
南 智次郎「桃山陵墓地内銀明水の井戸浚えに伴う調査」、同上書。
笠野 毅「桃山陵墓地南側境界擁壁設置補償工事区域の調査」『書陵部紀要』第 36 号、宮内庁書陵部、1985 年。
内海克己・上村雅洋・土生田純之「桃山陵墓地内北参道の水道管布設替え工事に伴う立会調査」『書陵部紀要』第 37 号、宮内庁書陵部、1986 年。
福尾正彦「桃山陵墓地防災整備工事箇所の事前試掘調査」『書陵部紀要』第 50 号、宮内庁書陵部、2000 年。
福尾正彦「桓武天皇 柏原陵見張所改築工事箇所の調査」『書陵部紀要』第 55 号、宮内庁書陵部、2004 年。
徳田誠志「桃山陵墓地内竹根防止工事に伴う立会調査」『書陵部紀要』第 59 号、宮内庁書陵部、2008 年。
- (3) 「桃山御陵所新道開鑿工事ノ件」『内匠寮大正元年明治天皇大葬設備録』7 桃山御陵所ノ部 3。
- (4) 註(3)に同じ。
- (5) 註(3)に同じ。
- (6) 加藤次郎『伏見桃山の文化史』、註(1)前掲書。
櫻井成廣「豊臣秀吉の居城」聚楽第 伏見城編、日本城郭資料館出版会、1971 年。
森島康雄「考古学から見た伏見城・城下町」日本史研究会編『豊臣秀吉と京都－聚楽第・御土居と伏見城』、文理閣、2001 年。
山田邦和「伏見城とその城下町の復元」、同上書。
森島康雄「伏見城 秀吉の隠居城」中井 均編『信長・秀吉・家康の城』(『別冊歴史読本』61 号)、新人物往来社、2007 年。



1 桃山陵墓地
石群A～G 全景（西から）



2 桃山陵墓地
石群A～G 全景（東から）



3 桃山陵墓地
石群A（西から）



4 桃山陵墓地
石群A（東から）



5 桃山陵墓地
石群B（西から）



6 桃山陵墓地
石群B（東から）



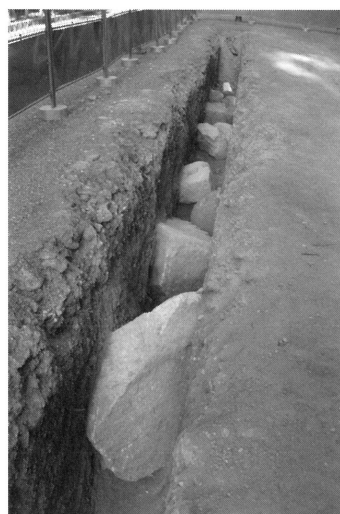
7 桃山陵墓地
石群C（西から）



8 桃山陵墓地
石群D（東から）



9 桃山陵墓地
石群E（西から）



1 桃山陵墓地
石群F（西から）



2 桃山陵墓地
石群F（東から）



3 桃山陵墓地
石群G（西から）



4 桃山陵墓地
石群G（東から）



5 桃山陵墓地
石群I（西から）



6 桃山陵墓地
石群J（西から）



7 桃山陵墓地
石群展示状況 1



8 桃山陵墓地
石群展示状況 2